

新島講座についての報告

新島講座は、創立百周年記念事業として、新島襄を記念して一九七九年から開設された事業の一つで、立学の精神を基盤として現代にふさわしい教育、研究の幅広い交流を図り、わが国の学術・文化の進展に寄与することを目的としております。

新島講座には、内外の碩学を講師として京都・同志社に招聘して開催しているものと、同志社から講師を派遣して東京に開催の場を設けているものとの二つがあります。

第十一回新島講座

昨年十一月二日(月)・五日(木)の二日にわたり中国、西北大学校長張 豈之教授を迎えて公開公演会を開催いたしました。

張 豈之教授は、一九二七年生れ、一九

五〇年北京大学哲学系卒業、一九五〇年から五一年まで清華大学文科研究所に学ばれ、五二年西安の西北大学に勤め、現在、西北大学校長として活躍しておられ、思想家・歴史学者として、その広い視野と学殖に支えられた数々のすぐれた業績を通して、すでに斯界の碩学として定評のある方です。

解放後、候外廬教授主編「中国思想通史」の著作、同じく候外廬教授主編「中国理学史」の仕事にもくわる。

「中国歴史大辞典・思想史」に主編、共著に「中国哲学簡史」、「中国通史」があり、その他多数の論文を発表されている。なお、西北大学と同志社大学は、現在學術交流を結んでいる。

公開講演会

○テーマ・「中国儒学思想の歴史的展開とその役割」

十一月二日午後一時十五分

於、同志社大学神学館チャペル

○テーマ・「三國演義」と事業成功の道

十一月五日午後一時十五分

於、同志社大学神学館チャペル

第一回の講演は、「中国儒学思想の歴史的展開とその役割」と題され、科学技術の進歩のなかで、精神生活の重要さが直見されてきている。今年、中国古代に生まれた儒学の再評価が、洋の東西にわたって出てきているのは、その一つの現われであるう。

張先生のこの講演は、現在の中国における最高水準の儒学思想研究を、わかりやすく述べられたものである。

まず、儒学とは何かを、道徳論・文化論・為政論・教育論にわたって説明。ついで、その歴史的展開を、「人間学」としての発生期から、漢代に国教となつて国家尊厳観が台頭したこと、南北朝時代にはその理性主

義が自然科学と結合したことを論じ、さらに唐代から、宋代の朱子学と明清時代への影響を論じられた。そして最後に、儒学研究の現代的意義について、中国人の思考のなかに浸透している儒教を、その現解のために客観的に研究することの必要をとかれるとともに、例えば、「和して同ぜず」という『論語』の言葉は、国際社会でも尊重されるべきである、と結ばれた。

文化大革命期における儒教評価の誤りをただし、自然科学との結合を具体的に論じられたところは、張先生独自のものであった。

第二回の講演は、『三國演義』と事業成功の道」と題されたものである。

『三國演義』は、日本でもよく知られた長篇歴史小説、明代の羅貫中の作品であるが、張先生は、(一)人材の尊重——三顧の礼を尽して人を迎えること。(二)事業には身を投じ、死してのち曰むこと。(三)大謀の前には小事を忍ぶこと。(四)周辺に有能な知能集団を確保すること。(五)謙虚に身を慎み、予

め失策を防ぐこと、の五点にわたって、登場人物の行動と心理を通じ、この作品からくみとれる人生の知恵を論じられた。

『三國演義』は、封建制度の長い歴史を包括しており、封建道徳をもちこんだものではあるが、現在でも、生きた人生の経験を学ぶことを強調された。

第八回東京新島講座

昨年十一月七日(土)東京・有楽町朝日スクエア(千代田区有楽町二一五一・朝日新聞記念会館内)にて公開公演会が開催されました。

十三時三十分から始まった講演会は、園部庶務部長の司会で松山総長のあいさつ、井上勝也大学文学部教授、奥田 聡大学工学部教授の順で行われました。

〔演題ならびに講師〕

○教育者新島 襄

同志社大学文学部教授 井上勝也

○産業構造の大転換と二十一世紀への道

—新島 襄と加藤与五郎—

同志社大学工学部教授 奥田 聡

井上勝也教授の講演(写真上)は、幕末の元治元(一八六四)年、我国の近代化の先導者になる願望を抱いて密航を企てた新島襄は、九年間アメリカを中心にヨーロッパで生活した結果、欧米文明を支えているキリスト教とデモクラシーと全人教育を我国に導入することを畢生の事業に選んだ。明治七(一八七四)年、アメリカからの帰国に先立って、彼はアメリカン・ボードの宣教師補になり、合せてキリスト教主義の大学を設立することを表明した。近代科学を身につけ、民主主義を体得したクリスチャンの養成を考えていたからである。

新島の教育実践を支える教育哲学は、広く欧米での高等教育体験及び八カ国の教育施設の見学や調査を通して培われたものであるが、それはギリシャ時代から欧米の教育の根底に流れている全人教育(liberal education)を目ざすものであった。このような考え方が新島の教育思想の中核に据え

られるようになったのは、柱にアームスト・カレッジの教育体験にもとづくものと考えられる。とりわけ彼のアドヴァイザーであったシーリー教授教授 (J. H. Seelye) と、同じくアームスト・カレッジの教授を勤め、明治九年札幌農学校にやってまたクラーク博士 (W. S. Clark) のようなキリスト教的人格主義教育を目ざした教育者からの影響が大きい。シーリー教授は当時の学生に屢々 "Amherst aims to teach its student how to think for himself" アームスト・カレッジの教育目的は一人一人の学生に自力で自分の考え方を構築させることにある—といった言葉に示されるように、彼は教育目的を知識の教授におくのではなく、知識を善用する主体の形成に重点をおき、品性 (character) の陶冶を強調する。新島がアームスト・カレッジの一年次に化学を学んだクラーク博士も、札幌農学校にあって、たった八カ月間に大きな教育的感化を与えた背景にシーリー教授と共通する特性をもっていた。彼は開発主義の立



井上勝也大学文学部教授

場から学生の自主性、内発性を重んじ、学生の能力の開発、品性の陶冶に重点をおき、学生と共に広大な真理の海を面前にした謙虚な探究者であることを徹しようとした。



奥田 聰大学工学部教授

あった。彼は学生の個性を尊重し、彼らの一人一人を愛し、脱落者をつくらぬように配慮し、クラスで一番劣った学生に特別の注意を払う教育者であった。

二一世紀に向けて国際間の競争は益々激しくなり、各国は能力主義を助長し、英才教育に力を入れ、「個性尊重」の美名のもとに弱者を切り捨てる傾向を示している。このような状況の中で、教育者新島襄の生き方は現代の教育の在り方に多くの示唆を与

えてくれるのである。

次に奥田 聡教授の講演(写真下)は、二度の石油ショックを経験する中で、わが国の産業構造は自動車、家電製品などの加工組立て型産業に中心が移り、さらに進んでハイテク産業へと構造変換が急速に進んでいることはご承知のとおりであります。

この急ピッチな進展は十八世紀に英国で始まった産業革命を上回るインパクトをもつといわれ、新産業革命とも呼ばれております。新産業革命の担い手は半導体をはじめとするマイクロエレクトロニクスであり、第二は新素材産業、そして第三にバイオテクノロジーがあります。通産省の予測によると、紀元二千年にはこの三大技術のもたらす市場は約二三〇兆円とみられています。

一方、日本は貿易立国の立場をとっており、現在五百億ドル余りの貿易収支の黒字を出していますが、日本は世界一の債務国であることは余り述べられません。日本の高度成長のもとになったのは、戦後の技術

導入にあったといえますが、これにより生産設備の近代化は達成されました。また一方、わが国の技術開発には、先発優先、すなわち、一社の開発技術を尊重する気風に乏しく、過当競争を発生します。化学工業の分野では実に戦後の発展はすべて技術導入にあったといっても過言ではありません。生産性の追求、品質管理の徹底により、世界で最も良い工業製品を安く造ることができ、それを大量に海外に輸出しました。このような日本の工業態勢自体がいま海外から貿易摩擦という形で痛い批判を受けているものと解釈してよいでしょう。

しかし外国の模倣品でなく、オリジナルな開発品に対しては海外も歓迎で、二十一世紀への進路は、創造以外にはないと思われます。

新島襄の遺志により明治二十三年開校されたハリス理化学校はわが国の高等理科教育の魁であり、同志社精神を一言に示す「良心」は英語でいえば Conscience であり、科学に合致することで、自然の理に適

った、平易で自然な道に従うことといえます。加藤与五郎はハリス理化学校の第一期生で、日本のエジソンといわれるように、今日の先端技術のもとになるフェライトコアをはじめ多くの発明をされました。加藤先生は新島先生のお考えを伝えられた数少ない人の一人といえますが、心血をそそがれたのは創造性を育てる教育でありました。二十一世紀に向けての今世紀末の最も困難な時にあたり、新島先生の遺された良心の意味を新しい感慨をもって噛みしめたいと思います。